

親子の信頼感と

摂食障害傾向・アレキシサイミア傾向との関連

15009PCM 高島絵里

I. 問題・目的

先行研究において、母子関係と摂食障害・アレキシサイミアの関連について、養育態度・愛着と摂食障害・アレキシサイミア傾向との関連についての研究は行われているが、信頼感と摂食障害傾向・アレキシサイミア傾向との関連が明らかにされている研究は少ない。

可知他 (2006) の報告でも言われている通り、仮説 1 としてアレキシサイミア傾向が高い人は摂食障害傾向も高くなると考える。中井他 (2002) の研究では、男性の摂食障害の発症率が女性の 1/10 とされており、仮説 2 として男性よりも女性の方が摂食障害傾向を示す人が多いと考える。母子関係の障害という点において、信頼感を取り上げたが、Freyberger (1977) や清瀧 (2008) の研究から、仮説 3 は子どもの信頼感が高ければ、摂食障害傾向は低くなると考える。また、仮説 4 として、子どもの信頼感が高ければ、アレキシサイミア傾向は低くなると考える。信頼感を測るにおいて、今回の研究では幼少期から一番身近な存在であったであろう母親との信頼感を測定することとする。

II. 方法

1. 調査対象者と手続き

2016 年 10 下旬に私立 A 学苑の中学生 (190 名)、高校生 (390 名) またその保護者 (母親、その他) を対象に質問紙調査を行った。このうち、保護者と子どもの質問紙にはナンバリングされており、片方のデータがないもの欠損値を含むものは対象から除き、中学生 160 名、高校生 213 名を分析対象とした。質問紙は、生徒、保護者ともに、各クラスの担任の先生から配布され、自宅

に持ち帰ってもらい、回答してもらった。

2. 使用した質問紙の構成

(1) 子供用質問紙

摂食障害傾向尺度：日本語版 EAT-26 (新里, 1986), アレキシサイミア傾向尺度：TAS-20 (小牧・久保, 1997), 親子間の信頼感に関する尺度 (酒井, 2005)

(2) 保護者用質問紙

信頼感を測る尺度：親子間の信頼感に関する尺度 (酒井, 2005)

III. 結果・考察

(1) 各尺度の検討

① 摂食障害傾向尺度 (EAT-26, EDI-91)

はじめに EAT-26 (A6, A12, A18, A24 を除いた 26 項目) のみで、因子分析を行った。次に摂食障害傾向尺度 {EAT-26 と EDI-91 (過食因子) を組み合わせた尺度}, 30 項目について、因子分析を行なった。第 1 因子「ダイエット」 $\alpha = .840$, 第 2 因子「過食」 $\alpha = .854$, 第 3 因子「摂食制限」 $\alpha = .804$ であり、一定の内的一貫性が認められた。今回の研究において、後者の第 1 因子～第 3 因子の尺度を使用した。

② アレキシサイミア傾向尺度 (TAS-20)

アレキシサイミア傾向尺度 20 項目について、過去の先行研究でも使われている因子を使用した。第 1 因子「感情同定困難」、第 2 因子「感情伝達困難」、第 3 因子「外的志向」と命名した。それぞれの α 係数は、第 1 因子「感情同定困難」 $\alpha = .871$, 第 2 因子「感情伝達困難」 $\alpha = .638$, 第 3 因子「外的志向」 $\alpha = .132$ であり、第 3 因子においては、十分な内的一貫性が認められるとはいえない数値であったため、以下の分析から除

外した。

③信頼感尺度

1. 親に抱く信頼感尺度について

α 係数を算出したところ、 $\alpha = .931$ であった。

2. 子に抱く信頼感尺度について

α 係数を算出したところ、 $\alpha = .882$ であった。

④摂食障害傾向、アレキシサイミア傾向、信頼感の関連について

「ダイエット」「過食・食べ物への執着」「摂食制限」は、「感情同定困難」「感情伝達困難」と関連があるということがわかった。よって仮説 1 は支持された。また、「感情同定困難」「感情伝達困難」と「子が親に抱く信頼感」に関連があるということがわかった。

(2) 男女差の検討

摂食障害傾向、アレキシサイミア傾向、信頼感における男女差の検討を行うために、 t 検定を行った。その結果、摂食障害傾向においては、男性より女性の方が有意に高い得点を示した。よって仮説 2 は支持された。アレキシサイミア傾向においては、有意差はみられなかった。子が親に抱く信頼感において男性より女性の方が信頼感が高いという結果になった。親が子に抱く信頼感においては有意差はみられなかった。

(3) 重回帰分析による摂食障害傾向・アレキシサイミア傾向・信頼感の関連について

男性における信頼感・アレキシサイミア傾向が摂食障害傾向に与える影響について、「子が親に抱く信頼感」・「親が子に抱く信頼感」・「アレキシサイミア傾向」を説明変数、「摂食障害傾向」を目的変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、「子が親に抱く信頼感」($\beta = -.179$, $t = -.1707$, ns)、「親が子に抱く信頼感」($\beta = -.018$, $t = -.175$, ns)であり、有意な効果はみられなかった。

「アレキシサイミア傾向」($\beta = .537$, $t = 5.220$, $p < .001$)であり、有意な正の効果がみられた。

女性においても信頼感・アレキシサイミア傾向が摂食障害傾向に与える影響について、男性

と同様に強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、「子が親に抱く信頼感」は有意な正の効果がみられた ($\beta = .185$, $t = 2.041$, $p < .05$)。影響はみられたものの、正の影響を示していたため、仮説 3 は支持されなかった。清瀧 (2008) の調査や安田 (2000) の調査では、基本的信頼感の獲得が摂食障害の発症を防ぐ役割になるということが言われているが、今回の研究では、子どもの信頼感が高いと摂食障害傾向を示す傾向に高いという結果になった。今回の研究では Rotter (1966) が提唱している、対人的信頼感に着目できていなかったり、天貝 (2001) は、ある一定の時期以内に、不幸にして基本的信頼が成立しなかった場合でも、広い意味での信頼感には修復の可能性があることを示唆していると述べている。そのため、信頼感を抱く対象が母親だけに限らず、信頼できる他者の存在が母親以外に考えられ、仮説は支持されなかったと考える。「親が子に抱く信頼感」においては有意な効果はみられなかった ($\beta = .170$, $t = 1.927$, ns)。「アレキシサイミア傾向」においては、有意な正の効果がみられた ($\beta = .212$, $t = 2.461$, $p < .05$)。男女ともに「子が親に抱く信頼感」が高い人は、「アレキシサイミア傾向」が高いという関係性が示されたが、この結果は、相関の結果から、「子が親に抱く信頼感」が高ければ「親が子に抱く信頼感」が低いという結果とも関連しているように考える。もし親への信頼が高い子どもの場合、親にも自分のことを信頼してもらいたいという思いが強くなるのではないだろうか。その信頼感を勝ち取るために、方法は様々あると考えるが、一つに、親にとって聞き分けのいい子、親に従順な子になってしまうと考える。安田 (2000) の報告でもあったように、親にとって聞き分けのいい子が、自分の意思を押し殺し、感情を抑制してしまうため、意思や感情を認識できなくなってしまい、アレキシサイミアの発症の原因の一つになってしまうと考える。